川と イモムシ

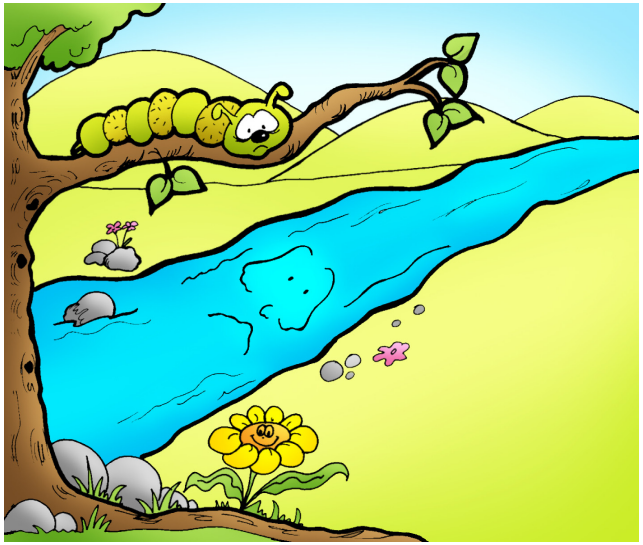
「ぼくも あんなに 飛べたらなあ。

鳥のように 木々の 間を ぬけて、

気ままに 飛んで 行けたらなあ。

だけど、ぼくは 地上に しばり付けさ。

この 重い 体で よたよたと 進むだけ。



キラキラ 光る 川の 上に 張り出した 枝では

イモムシが けんめいに はっていた。

ゆっくり のろのろの イモムシ君。

毛むくじゃらの 頭を もたげると、

すばらしい ながめに 目を 見張った。

鳥が 風に 乗って 空高く まい上がる。

自由気ままに 空を 飛び回っている。

イモムシを 見ると、笑って 冷やかす

ものも いる。

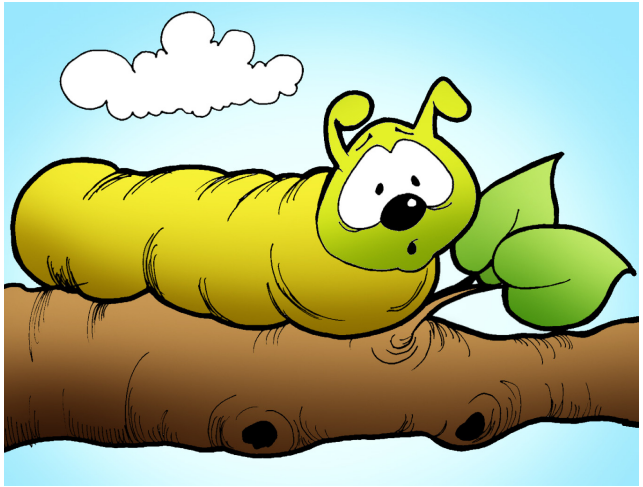
「毛むくじゃらの イモムシよ。

腹ばいに なって 地べたを はう 下等動物。

自分が あんなので なくて、よかった。」

げんめつした イモムシは

気分が しずんで むっつりした。



すると とつぜん、体の 中から

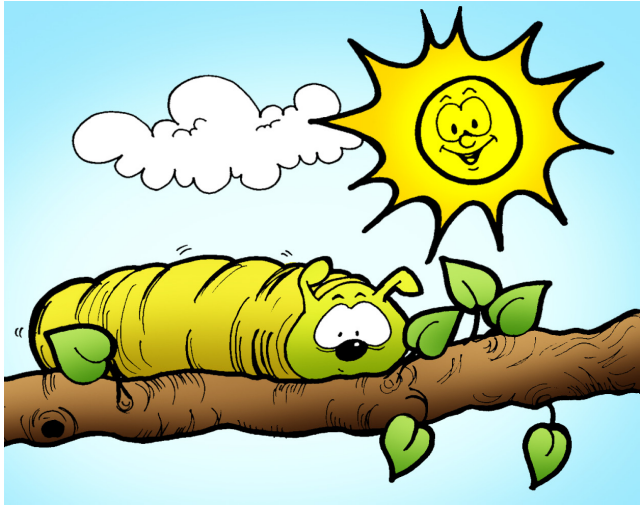
絹糸みたいな ものが 出てきた。

ため息を つく イモムシ君。

「何て ことだ。一体 今度は 何なんだ？

またもや トラブルかい？

体が がんじがらめだ。



動けないよ！」

いやおうなしに、体は ぐるぐるまきに。

暗やみに 閉じこめられた イモムシ君は

まゆの 中で ねむりに 落ちた。

川は ため息を ついて 思った。

「毛むくじゃらの イモムシ君。

君が つらいのは つかの間の こと。

君が 何に なるのか、ぼくには 分かってる。

同じ サイクルを 何度も 見てきたからね。

本当に 悲しいのは、ぼくの ほうさ。

浅過ぎて、子どもたちが バシャバシャ

遊びに 来る ことも ない。」

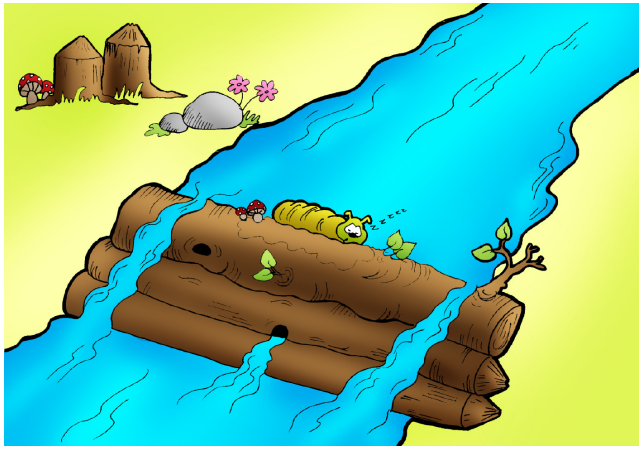
すると、川の 向こうから ビーバーが

あらわれた。

切り取ったばかりの 枝を くわえて 泳いで

来る。

ビーバーは、枝を 川の 真ん中に 固定した。



川幅が 広く なってくる。「一体 何だ、

これは？

ぼくの 流れを 止めるとは。

こんなの、おし流して しまうぞ。

きれいな 流れを 保たなければ ならないの

だから。」

ところが、ビーバーは もっと 枝を 集めてきた。

そして、川の 中に しっかりと 固定していく。

枝の 上に、どんどん 枝を 重ねていく。

ビーバーと 川の 大合戦だ。

川は、必死に 枝を おし流そうと する。

だけど、ビーバーは あきらめない。

枝々は しっかりと 固定され、

ついに 出来上がった ダムの 一番 上には、

イモムシ君の いた 枝が 乗せられた。

枝の 中では、イモムシ君が ねむっている。

川は この間中、ずっと ぐちを こぼしていた。

「ぼくの 流れを せき止めるなんて。

もう、こんなに 大きく なっちゃったよ。

食べ過ぎの 太っちょみたいじゃ ないか！」

空高い 所では、お日様が 見下ろして

ほほえんでいる。

枝で できた ダムの 上では、まゆの 中で

ねむっている イモムシ君が 温まっている。

何日か たつと、ついに イモムシ君は

目を 覚ました。

光が 差しこむのを 見て、

まゆに できた 小さな 穴から 出ようと

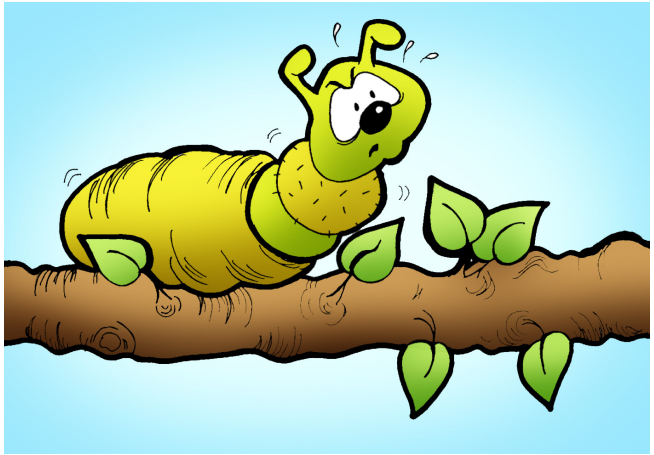
もがく。

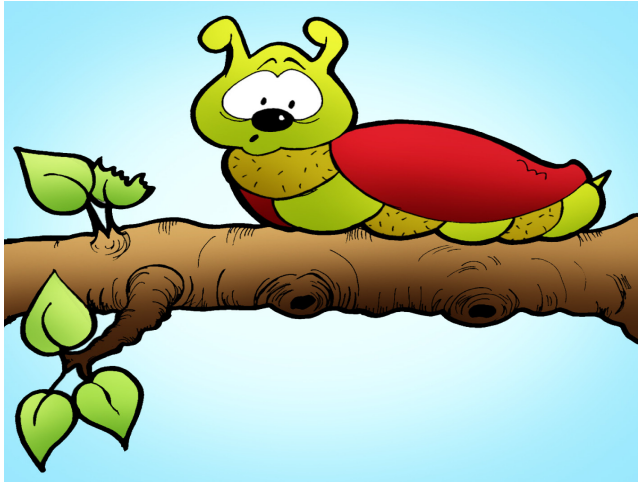
穴が 小さ過ぎて、苦しいの なんの。

やっとの 思いで、通りぬけた。

ひとたび 外に 出てみると、何かが ちがう。

何かが すばらしく、新しい！



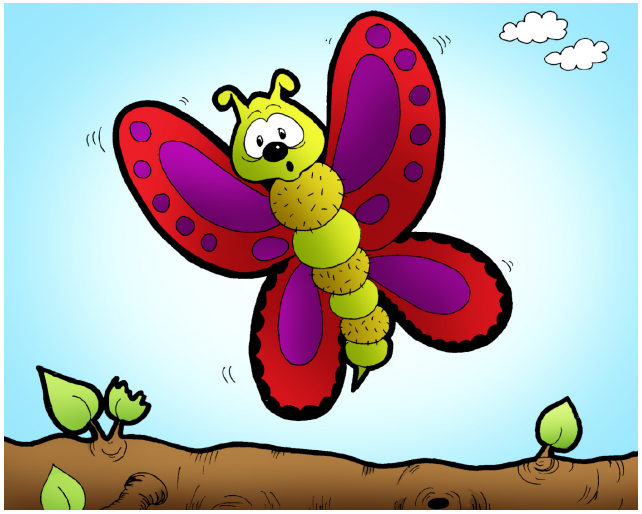


両わきに 折りたたまれていた ものが、

かがやきを もって 広がった。

今までに 見た ことも ない ものが、

暗やみの 中で 作られて いたのだ。



「一体 これは 何だろう？」

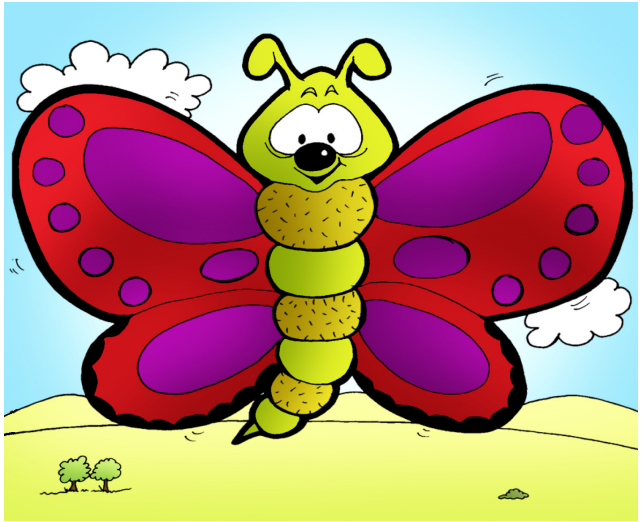
息を のむと、そよ風の 中で 羽ばたいて みた。

すると とつぜん、体が ふわっと 空に うく。

木々に 向かって、まい上がる。

明るい かがやきを 放つ その 羽に、

生き物たちが 目を 見張る。



「ぼく、飛んで いるぞ！」

思わず、喜びの さけびを 上げる。

おどろきの 目で 周りを ながめる。

地上では、川が プールと なって、

かがやきを 放っている。

水の 中では、子どもたちが 笑いながら

遊んでいる。

川は 言った。「ぼくも 今は 分かったよ。

ぼくたちは、こんなんや 問題に

ていこうするけれど、

それは、大きな 恵みを ぼくたちに もたらす

ために

神様が 計画して くださった もの

なんだってね。」

作者不明　絵：レイラ　彩色とデザイン：ロイ・エバンス
出版：マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル